

七月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

右巻き左巻き

武田 弘之 神奈川

生れ棲みし藤棚の巢をなつかしむ鳩ならんまた庭に来遊ぶ
汝が棲みし藤棚は取り払はれて巢もなし庭に来遊ぶ鳩よ

目のみにはあらず心も弱れるか「若手」を「苦手」と読みまちがへつ

一生かけ生いよの証あかしの歌づくり究めゆくべしまだ八十九

ネジバナは右巻き左巻きそれぞれを螺旋に咲かす暑き日の下

空壇

島田 暉 神奈川

野も山も春の光に抱かれて大地は温む母の香りす
春嵐吹けば空壇なま笛になり生のコーラス唄へ踊れと

人波をかき分けてゆくこともなくコロナ自粛のわれ深海魚
蜘蛛の巣にからまれしごと籠もるなりコロナ禍の世に三密さけて
生きづらき世と言ふなかれ春の野に真つ直ぐ立てる若桐の足

花がすみ

福士りか 青森

花がすみ欲しいままなる白内障けふひたすらに大根きざむ
カンタンな手術と人は言ふけれど水晶体を抜くなんてそんな
「見えます」と言ひつづけければおのづから鬱々となる視力検査は
白内障手術を待てり八十の婦人とさくらの話などして

すいせんが咲きはじめれば津軽野にわれもわれもと花の咲き出づ

電話にて

田中 愛子 埼玉

つばくろが風を呼ぶのかはた風がつばくろ呼ぶのかペランダずし
電話にて「今日ね」と言ひて春の日をそれぞれ祈る父の命日
土曜日は今でもうれし届きたるだちや豆にてごはんを炊けり
オニオンにトマトや鯛を散らしつつ思ひ出したりさうカルパッチョ
緊急のアラーム鳴りてそのしばし神経痛をわすれてゐたり

☆

☆



水島 晴子 兵庫

ものかげに移されてあり倒れたる一樹の下に立ちぬし名札
愚か者莫迦よと叱るふた親に早く別れてひたすら愚か
「かはいさう」とこちら向きたり睫毛まで老いつつ白くなりたる人が
悔いいくつ抱きて歩む路のべに小草は花の青澄みて咲く
黄金の蕊装へり花集りて真白にそよぐ垣の小手毬

杜 沢 光一郎 埼玉

自転車で横軀腰骨折つてしまひお花見の季節をりハビリの日々
素つ裸にされて体を拭かれをり身体検査受ける受刑者のやうに
マスクの中で小さくしゃみしてさへも批難の目付きが我に向けられる
白血病のりこえ四冠の選手のニュースリハビリのわれも激励を受く
桜花賞で珍しく白馬が優勝せりウイニングランの姿眩しも

高野 公彦 千葉

裏町のひとと桜楽しめり御多分連を遠く離れて
送電塔ほとりに立てば高速で電流そらを走るしづけさ
凡歌十首作りし今日の余白にてしづかに読めり漱石小品
賢者あり半可通あり無知の人ありて悟りに近きは無知か
しづけさは火星のごとし一秒に五十回ほど羽搏つハチドリ

仲 宗角 三重

霧はれてしまふがごとき風ありてだれかがどこかで呼ぶ声はして
沢のなか背に負ふ干魚のほほひとつ買ひにいくかと板戸を開く
このあたりでもう死んでゐてもいいはずだ九十の足が無性にいたむ
山を見てまた川を見てたのしめどこの目弱りて多くは見えず
なにするといふにあらねど日は暮れてもはや明かりがなければ見えず

奥村 晃 東京

本当に頭抜けて強い関取が一人もない春場所淋し
大関復帰をみずから遂げし照ノ富士優勝するかも千秋楽に
脚の怪我如何にかあらん照ノ富士大関復帰決めかつ優勝す
見てくれる客喜ばす懸命の相撲を取ると照ノ富士言えり
八百長は考えられぬ大相撲真剣勝負の十五日見た

森重 香代子 山口

藻を靡けすすむ速汐 海峡の端に佇みひとり眺てをり
なめらけき潮の楢円ほどもなく壊されてゆくうち目守る間も
突風におもひ奪はれ佇つ岩場 潮流標示いま七ノット
大橋の影くらぐらと海を這ひかなたの岸辺さくら満開
波濤みな翳をともし崩えゆく惜しみつつ佇つ春の岬に

日影 康子 富山

リビングの玻璃戸ま近く芽ぶく枝にジョウビタキをり息つめて見つ
帰宅してマスク外しし学生の孫があごひげ生やすを知りぬ
電線に触れては枝を剪られつつ堀ぎはのさくら精いつぱい咲く
竜のひげ繁るを褥と紅椿いくつこぼれて心地よげなる
限りある時間はかけがへなきものと思へど須臾に日は過ぎてゆく



狩野 一男 東京

葉ざくらの候に理解すわれわれの柵二柵は大養生中
春宵の電線のうへ鳩三羽哲学的に止まりゐる。見ゆ
心して待つにあらねど生まれ来てはじめて古稀になる日近づく
メーデーの翌日、憲法記念日の前日、われは七十になる
哀愁の七十歳になる者へいろむらさきの桐の花咲け

宮里 信輝 神奈川

朝桜、昼夕桜見尽くせり非常事態のたまもの日々

いちまいのさくらはなびら舞ひてきて隣りぬ園のすみのベンチで
飼犬とよく似た顔をしてをりぬ散歩にしたがふ飼主たちは
高貴にて高価さうなる飼犬にリードで引かれ来る人間よ
ヌードなるフウ、キリ、キプシ、モミジ等が纏ひゆくなりみどりの衣

岡崎 康行 新潟

燃ゆるつばさテレビに映したたかひのなき大空を旅客機帰る
石に刻まず残雪にでも刻みおけ善磨のうた語彙投ぐるごと
この痛み四、五秒耐ふれば消ゆらむか築後八十年付き合ふからだ
あけがたを胃にくる痛み遣りてみつ便利なく、字にからだを折りて
窓の外に黒く大きな蛾がとまり死にゆくか命養ふかわれに分からず

小島 ゆかり 東京

ひのくれのゆらゆらゆるる何ならん一頭二頭みじろぐ柵
無風なるゆふべは奇し灰白のさくらは犀のやうにしづけし
わが猫は古猫ふるねこわれは古人ふるひとなりて遊べり爛漫の春
葉ざくらを待てばこころに吹き起こる風あり若き欲望に似て
コロナ禍の街を行き交ふ人びとに二度なきけふの若葉風ふく

古屋 祥子 群馬

古語辞典、和英辞典と詰める柵に緊張感見せて落ち着く辞書ら
死の世界、生の界いづれも希望せり 今是目前の山桜見る
十九度の気温より一氣に十一度 白いセーターを又も取り出す
用足しに通ふ廊下は長くして支柱たよりに一歩一歩と進む
「記憶力凄い！」と褒められ大真面目に受けて更には楽しく過ごす

影山 一男 千葉

つひの花咲かせて姿かくれたり旧家に聳ちし桜古木は
この町のランドマークの桜なれ最後の花の花びらの舞ふ
「人流」と耳ざはりなる言葉もて個を圧しては五輪開くか
プロンプター見る目の虚ろ国民を見る目の虚ろあはれ宰相
新型コロナワクチン接種の封書きて青年歌人も老いにけらしな

桑原 正紀 東京

蟬丸の歌「別れては」と「別れつつ」を行きつ戻りつせり小半時
「孫の手」と言ふとき浮かぶ老幼のふたつの笑顔 佳きかな日本語
自販機の飲み物がみな「冷」となる五月まぢかき光ふる街
鉢割れの猫の頭が植込みの上よりのぞく蝶を追ひきて
夕照りの路地へ曲がればあな眩ゆ垣に炎え立つべニカナメモチ

木 畑 紀 子 京 都

鉢植糸のいちごに白き花三つ清楚といふ語おもひだしけり
ホトケノザ抜き捨てむとし見入るかな花のしくみの巧妙なるを
あららぎのごとくに伸びて黄の小花つけし葉牡丹その名脱ぎ捨つ
みんな夢言つてしまへば易き世か飛行機雲が空にほどけて
燕、雀あそぶ野にでて浮かれ女めとならばやたんぽぽが咲いてる

大 松 達 知 * 東 京

さんざんからだを食べて君は言う目玉食べない後が怖いから
食べるつていう言い方で然りげなくブタの大腸からだに入れる
じゅうぶんに生きたと思っういっしゅんがこのごろ兆すやわらかく寝る
寂しさが怒りに換わるその速さ知つてときおり塩豆大福
ぼくの機嫌とつてよくあり、そのぼくの機嫌をとつて(残波ブラック)

田 宮 朋 子 新 潟

ひとふゆの折れ枝、朽葉あらはれて雪消ゆきけりの庭はみだりがはしし
おもむろに浮かびあがれる錦鯉さかづきほどの円き口あく
真上からみれば細身の錦鯉もろ手に抱かば重たからまし
早春の海のかをりがよみがへる出雲崎産の石蓴いもも売られて
砂時計の砂のごとくに頭より枕へこぼれゆく見当識



津 金 規 雄 神 奈 川

人逝けり陽春の日は里山にまぶしく射して照りわたれども
五十五年の恩義を想ひ憶ひつつとどまる歩みただ黙すのみ
野萼のうすむらさきの若き日の遥けくもあるか君に学びき
自がために生きる意欲のうすれゆく齡となれり甘野老あまじろう咲く
つばくらめ翔けたる後の空深しふかき師恩を想ひやるかな

小 山 富 紀 子 京 都

やめとこか出よかと迷ふ竹の子に出よし出よしと絹糸の雨
朝つゆは夜つゆを知らず同じ葉に宿れど夜つゆは朝つゆ知らず
髪結ひて花衣選り紅さしてさてマスクしてかなしくなりぬ
新聞を開けばコロナの文字あふるこぼさぬやうにあわててたむ
コロナ禍の世にしかと咲きしかと散る樹齡百年の大紅しだけ

清 水 正 子 神 奈 川

柳川の旅は記憶のひだのなか飛ぶ雲みればフラッシュバックす
黒眼鏡かけた白秋のそつくりさん水汲み場ぼらばにるしよ川下りすれば
竜骨の反りうつくしき船ねむり見の限り干潟ひるの沖の端
クワガタを採る少年も「帰去来」の詩碑も涼しげ木洩れ日ゆれて
柳川の南風なまかぜに吹かれてよき旅す足弱のいまは叶はぬものを

小 嶋 一 郎 佐 賀

上うへ翳かげなるこの眼を濯ぐごとくにもガラス戸に来て迂る黄揚羽
午前二時小用たに起つこの脚が人並みにまだ言ふことを聞く
月一度会へる真乙女カットのみ七〇〇円の床屋に來れば
十日余も首筋疼くその因の見立てはなんと寝癖のせめと
洗濯せんたくするかしないかこのマスク結局は棄つ三度目なれば



後藤 美子 北海道

白木蓮と辛夷の区別がつかぬといふ夫よ数独に熱中しつつ

コロナ禍の閉塞感が蔓延すさもあれ結婚六十二周年

あとは死ぬだけかなど呟きデザートの紅き苺をつぶしぬる夫
よるめく事もの壊すこと増ゆとおもふあらがひ難く老い深まるか
マスクせぬ暮し思ひ出になりゆかんドラマのヒロインたのしげに笑ふ

藤野 早苗 福岡

そこまでは己の舌のとどかねば搔いてやるなり猫の頭頂てんかち

てんかちは方言と知り驚愕す五十九年近くを生きて

仰向けに四肢を開いてころがるはヘソ天といふ猫の親愛

ハウスレスでなくともホームレスである人をり炊き出し鍋の輪の中
ログインするサイトで異なるアカウント自分がだれかわからなくなる

風間 博夫 千葉

食卓の一边に二脚向かひにも二脚妻とわれ、子らと向きあふ

食卓がわが書齋にて四脚の椅子のひとつにひねもすすわる

令和三年春三箇月食卓の椅子にわが身をあづけてゐたり

いちはやく空き椅子とならむ妻すわる椅子のとなりのわれの一脚

一脚の背のなき椅子に腰おろし今朝もONする電気カミソリ

橘 芳園 新潟

家一步出づるを旅と思ひしに家居も旅と思ふこのころ

西行は出家をなして俗世捨てわれは僧辞め俗世を捨てぬ

家にては恩徳讀を職場にては君が代歌へと強ひられたりき

白足袋も白衣も汚れやすかりき用なくなりしものを捨てたり

手のあらばもつと仕事のはかどらむカラスが枝をくはへてゐたり

水 上 比呂美 東京

大倭豊秋津島武蔵野の森公園に桜咲くらむ

五分咲きの染井吉野と散りぎはのしだれ桜がならび立つ丘

昼すぎの修景池に波生れて番の鴨をり一羽の鴨をり

武蔵野の森公園の中空をセスナ飛びくる滑走路めがけて

半月が東のそらに透けてをり三月午後の浅葱のそらに

鈴木 竹志 愛知

洪民に生まれ育ちて家族詠む工藤玲音の歌のよろしさ

歌を詠みエッセイを書く 職場では「ちいさいほうの工藤さん」が

「水中で口笛」吹くのは難しいと思ひつつ読む『水中で口笛』

啄木愛、盛岡愛のあふれたる歌集を読めば盛岡恋し

こんなにも刺激を受けてよいものか工藤玲音の第一歌集

原 賀 環 子 東京

アルセーヌ・ルパンを読んだ放課後の図書室を出てあとは呆たり

することをしないはバツで、しないことするはマルなり七十代われ

すこしだけ男雛女雛を内向きに置けばふたりの目もとやはらぐ

収束をフルとわらひ疫病下に二度目をめぐぐる四月はかの日

日夕におもはむ限定十名の葬儀に逝きし峻お父さま

水上 芙季 東京

畳まれた洗濯物を崩さぬやうベッドに入りゆく花冷えの午後
内緒話してゐる野球選手らは亜麻色の大蛤の夢

「あけましておめでとう」とか言つてくる四月の友よマスクがでかい
「cast rally」といふ語が肩に乗りきたり閉店セール中の薬局
化粧水、米、酢、洗剤、入浴剤ただしく減つて春の果てなり

大野 英子 福岡

スニーカーのあまたうごめく職安に艶光りするヒールは職員
密を避け、避けられぬまま呼び出しに神経かたむけ職安にゐる
貰ひ泣きくらゐの額の申告を済ませて歩く八千歩ほど

政治家の濁世ちよせコロナの塵土ちんどなるにつぼん、チャチャチャ桜が咲いた
俯瞰して見てゐるどこまでもつづく桜並木の……
三階リデ

松尾 祥子 東京

疫病えびみにて人と会はざるひと年に白髪となれば空が新し
生涯初ツープロックの白髪はくはつとなりて弥生の街へくり出す
血圧によしと言ふものぞ母がため鰻や「さか井」に蒲焼きを買ふ
一八〇ありたる母の血圧が九十五になる鰻を食みて
六十一過ぎて見えくるものあり花散り終へてしづかなゆふべ



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八—一〇六

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六—三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷二—一四—一六

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二—二四—四三